

# 正岡子規筆「五月雨五句」の周辺

Around Masaoka Skik's Five Songs on Early Summer Rain

高橋利郎

Toshiro Takahashi

## 序

三十五年ほどでその生涯を閉じた正岡子規（一八六七―一九〇二）だが、著作は膨大で、全二十五巻にもおよぶ全集が編まれている。それと呼応するように、俳句や短歌を揮毫した短冊や懐紙、書簡や各種の原稿などをはじめとする筆跡も数多く遺されている。子規は俳人や歌人、随筆家としてのみならず、またそれらの批評で知られ、高浜虚子や河東碧梧桐、伊藤左千夫、長塚節、岡麓ら子規のもとで知性を育んだ多くの後進が彼のあとに続いた。

近代文学に大きな足跡を遺したことは言うまでもないが、子規は幼少期から書に親しんだ能書でもあり、晩年まで書に関心を持ち続けていた。そして、その筆跡は、子規を尊崇する人物を中心に珍重され、今日に至るまで高く評価されている。

本稿で扱う「五月雨五句」は、歿する一年ほど前に揮毫された子規の遺墨とみられ、代表的な句を記した自筆懐紙である。さらに、

掛幅に仕立てられたこの懐紙には、長塚節らの書簡を一巻に仕立てた卷子本が添えられ、箱書きからはその伝来の経路を詳しく知ることができる。文献の上ではしばしば取り上げられる作であるにもかかわらず、これまで遺墨集などに掲載される機会はなかったようである〔註1〕。

ここでは、新出のこの遺墨を紹介すると同時に、執筆の背景を整理し、その書の特徴を明らかにする。さらに伝来の過程を追いながら、子規を追慕する人びとのあいだでその筆跡が尊重されてきたことの意味を考えることにしたい。

## 第一章 正岡子規筆「五月雨五句」について

### 第一節 現状

まずは「五月雨五句」の現状について記すことにしたい。

現在の所蔵は成田山書道美術館。本紙は縦三五・〇cm、横四七・

四 cm。無地の紙本に墨書されている(図1)。本文は次の通りである。

五月雨や上野の山も見あきたり

病人に鯛の見舞や五月雨

病人の枕ならへて五月雨

五月雨や棚へとりつくもの、蔓

さみたれや背戸に落あふ傘と傘

装丁は三段表装の掛幅、一文字と風帯は紺地雲龍紋緞子、中廻は薄茶無地紐、天地は茶地揉紙、軸端は黒漆塗切軸である(図2)。

柱を細く取り、茶掛け風に仕立てている。表具外寸は縦一二七・〇

cm、横四九・五 cm。表具背面の下部には朱文楕円印が押されており、

印文は「門間」と読める。

箱は二重箱。外箱は桐材に透漆のようなものを掛けている。印籠

蓋の箱は、身よりも蓋を深く作る。蓋の表裏には次のような墨書を見ることができる(図3)。

〈表〉

子規筆五月雨五句

〈裏〉

箱書 高浜虚子

附 長塚節及門間勝弥書簡卷

初代 長塚節

二代 岡麓

三代 門間春雄

四代 池田龍一

この外箱には二件の作が収められ、それぞれに合わせた内箱が詠えられている(図4)。

「五月雨五句」が収まる桐箱には、高浜虚子による次の箱書きがある(図5)。

〈表〉

子規筆 五月雨五句

〈裏〉

昭和二十五年七月二十三日 池田龍一氏囑 虚子記

さらに外箱に記される通り、この幅には、長塚節の書簡二通と門間勝弥の書簡一通を一巻にまとめた卷子本が添えられている。その箱書きには次のようにある。

〈表〉

長塚及門間書簡

〈裏〉

池田龍一

外箱とこの書簡卷の箱は池田龍一の揮毫であることから、子規の

「五月雨五句」に合わせる形でちに書簡巻を添わせ、同時にこれら収める箱を誂えたものと考えられる。昭和二十五年の時点で、この作を池田が所蔵していたことがわかる。

## 第二節 「五月雨五句」の句

これらの句は、講談社版『子規全集』第三巻に収録される「俳句稿以後」の明治三十四年夏、「天文」の部に、懐紙に揮毫された順序で掲載されている。これによれば、この五句は、明治三十四年七月六日の新聞『日本』に掲載されたものである。また、六月三十日付の『ホトトギス』第四巻九号では、高浜虚子（一八七四―一九五九）が担当する「消息」欄にも、子規の様子とともにこれらの句が紹介されている〔註2〕。第四巻九号の発行日は六月三十日となっているが、虚子はこの「消息」に「七月五日記」と記している。実際の発行日が遅れたためだろう。『ホトトギス』では、四句目の「棚へとりつく」が「垣にとりつく」となっているのも、虚子の記憶違いによるものである。

この句を詠み、揮毫した子規の様子は、先の虚子の稿に詳しい。子規はこのころすでに死の床についており、病床では執筆に強い執念を示していた。「二三日前日本新聞に墨汁一滴もなければ俳句もなく、甚だ気が、りになりしま、相訪ね候」という虚子は、子規

のもとで坂本四方太と合流する。「容態如何」と尋ねた虚子に対して、子規は「え、のか悪いのか自分にもわからぬ」と答えたが、様子は優れず、夕方近くになると発熱が著しくなった。病による苦悩の様子には、病床を取り巻く者も息苦しさを感じるほどだった。

此日懊悩の真最中、母君も妹君も四方太君も小生も口を箝み手を束ねて、呻吟の声に心消ゆる許りなりし時、懊悩の極にや、十句でも作らうかとの事にて板に紙を張らせ仰臥の儘筆取りて五月雨の句を四五句認められ候。

苦痛に呻く子規が詠んだのがこの「五月雨五句」である。虚子はさらに筆を擱く子規の様子も続けている。

其後熱氣漸く減ずるに従ひて疲勞甚だしきもの、如く板も擲ち左下を下に横臥して唯うち唸きつゝのみをられ候。右の句作は苦悶の極の発作的勇氣たるに外ならざるべく候。

布団に横になったまま執筆活動が続けていた晩年の子規は、板に紙を張って揮毫に臨むことも少なくなかった。

ところで、この句を詠んだ日はいつなのだろうか。講談社版『子規全集』第二十二巻の年譜にも「七月初旬頃」とされるだけで特定されていない。

新聞『日本』にこれが掲載されたのが七月六日、虚子の記述が五日であることからすると、下限はこの日ということになる。また、

子規が『日本』に連載していた『墨汁一滴』と題する随筆は、この年の一月十六日から始まって七月二日に終わっている。一月に数日休載したほかは漏らさず毎日書き綴っていたことから、虚子はこれが掲載されないことを訝しく感じたのである。したがって、当然、この「五月雨五句」揮毫の様子は『墨汁一滴』には記されていない。

句を詠んだのが五日の夕方だとすると翌日の『日本』には間に合わないだろう。虚子の「二三日前」という書きぶりから推すと、『墨汁一滴』終了翌日の三日ではなく、さらにその翌日の七月四日と考えるのが適当であろう。五句がそのまま六日の『日本』に掲載されていることから、この懐紙は、虚子が述べる「苦悶の極の発作的勇氣」で筆を執った、子規の自筆稿本とみて差し支えない。虚子は冒頭の「五月雨や上野の山も見あきたり」を、自ら選んだ『子規句集』にも入れている【註3】。

この句について、斎藤茂吉は次のように評している【註4】。

これは子規の晩年の句だ、そして子規自身でも棄て去るべき句ではないと思つて居ただらう。門間春雄君所蔵の五月雨十句の軸の書きぶりを見ると、それがよく分かる。僕の独断言によると此は佳句であつて棄つべきものではない。そして『鶏頭の十四五本も有りぬべし』などと同じく、これから子規の進むべき純熟の句がはじまつたのである。もう寸毫も芭蕉でも蕪村

でもないのである。そして、『夕顔の棚作らむと思へども秋まぢがてぬわが命かも』などの晩年の和歌に比すべく、かうなれば俳句も和歌も一如だと僕は思ふ。然るに此句は碧梧桐虚子選の子規句集に収録されてないばかりでなく、俳壇にゐるほかの人も真に此句を論じたことはない。

茂吉は、この句こそ晩年の子規が芭蕉や蕪村の影響から離れて自らの風を打ち立てた、画期を示すものだという。「鶏頭の」の句も茂吉が高く評価して、今日では子規の代表的な句として膾炙している。五月雨の句も、これに並ぶ佳句であると断じているのである。

茂吉は、子規自身がこの句を棄て去るべきでないと考えていた様子は、「門間春雄君所蔵の五月雨十句の軸の書きぶり」を見れば理解されると述べる。虚子の述べる「苦悶の極の発作的勇氣」をその筆跡の上に認めたのであろう。茂吉の眼にした「五月雨十句」は、このころ門間春雄が所蔵していたこの「五月雨五句」である可能性が高い。子規の句会では一題に対して十句を詠むことが通例であつた【註5】。虚子を前に子規が「十句でも作らうか」と述べ、五月雨を題に五句を詠んだのもこれによるものと考えられる。茂吉が「五月雨十句」というのは、これに倣つたものか、あるいは「五」の字をいづれかの段階で「十」と誤植または誤読したからではなからうか。

子規には、「根岸」という題のもと、「五月雨やけふも上野を見てくらす」という句がある〔註6〕。病床に臥せる前の明治二十五年の句である。この年の十月、大学を退学した子規は日本新聞社に入社する。子規にとっては長く続くことのなかった、心身ともに充実した時期である。五月雨の無聊を詠んだのだろうが、晩年の子規は、病床から上野の山を見つめ続け、ついには「見あきたり」と言う。子規が、「五月雨五句」を詠んだときに十年近く前のこの句を記憶していたのかどうか、定かではない。しかしながら、この二句で見た上野の山は、大きく違う景色だったのではなからうか。

さらに、「五月雨や棚へとりつくもの、蔓」の句にも注目するこ  
とにしたい。

子規の絶筆が糸瓜の句であることはよく知られている。

糸瓜咲て痰のつまりし佛かな

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をととひのへちまの水も取らざりき

この三句は根岸の病床で最期を迎えた子規が窓の外に見える糸瓜棚を詠んだもので、子規の忌日を糸瓜忌と呼ぶ所以である。

この最期の三句に詠まれた糸瓜棚は、「五月雨五句」の二十日は  
ど前に設けられたものだった。『墨汁一滴』の明治三十四年六月十  
二日の項には次のように記されている〔註7〕。

植木屋二人来て病室の前に高き棚を作る。日おさへの役は糸  
瓜殿夕顔殿に頼む積り。

この日には河東碧梧桐が子規のもとを訪れていた。ほどなく日よ  
けのための糸瓜や夕顔が植え付けられた。五月雨を受けて蔓を伸ば  
し、やがて実を結んで秋風に揺れる様子まで、子規はその成長を見  
つめて数々の句や歌に詠み込んでいった。時には絵にも描いている。  
そして糸瓜棚が気に入った子規は、この翌年、棚に実った糸瓜を詠  
んだ句を最後にこの世を去ったのである。奇しくも、その絶筆揮毫  
のための筆に墨を含ませて手渡したのは、糸瓜棚を設けた日に訪れ  
ていた碧梧桐だった〔註8〕。「五月雨五句」に見える糸瓜の句は、  
子規が最期まで見つめ続ける糸瓜棚に、はじめて蔓が卷ついたとき  
のことを詠んでいる。子規の終焉は、このときからはじまるのであ  
る。

### 第三節 「五月雨五句」の揮毫

虚子が「板に紙を張らせ仰臥の儘筆取りて五月雨の句を四五句認  
められ候」とその光景を綴っているように、子規は病床に仰向けに  
なったまま板に張った紙に筆を揮った。晩年の子規にとって、こう  
した状態での執筆は日常だった。碧梧桐が絶筆となる糸瓜の句の揮  
毫の様子を描写している〔註9〕。

高浜に大急ぎで来いといふて帰って見ると、妹君は病人の右側で墨を磨って居られる。聽て例の画板に唐紙の貼付けてある

のを妹君が取って病人に渡されるから、何かこの場合に書けるのであらうと不審しながらも、予はいつも病人の使ひなれた軸も穂も細長い筆に十分墨を含ませて右手へ渡すと、病人は左手で板の左下側を持ち添へ、上は妹君に持たせて、いきなり中央へ

糸瓜咲て

とすら、書きつけた。

子規が病床で執筆せざるを得なくなったのは明治三十二年ころのことである。執筆状況の変遷は山上次郎『子規の書画』に詳しくまとめられている〔註10〕。脊椎を病んで座ることもままならなくなってきた子規は、立て膝にした左膝が切り込みに収まるように、机の中央左寄りの一部を切り取った。この机が重宝したのは明治二十九年から三十一年にかけて、三年ほどの期間だった。それ以降、三十二年、三十三年は、左側を下にしてやや上半身を起こし、半分臥せた姿勢で筆を執ることが多かった。三十四年になると上半身を振ることも難しくなり、仰向けのまま、ピンで紙を画板に止め、それを妹の律をはじめとする看護の者に持たせて揮毫するようになった。筆に墨をつけて右手に手渡すのも看護を担当する者の役割である。

虚子が目にした「五月雨五句」の執筆の様子もこの変遷と符合する。絶筆もまた同様である。

一見、特異な環境での執筆のようにも感じるが、子規の執筆への意欲は最期まで衰えることがなく、『墨汁一滴』や『仰臥漫録』『病牀六尺』などの随筆をはじめ、俳句や和歌も盛んに制作している。求められて短冊などを揮毫する機会も少なくない。「年譜」や「著作年表」に目を通すと、ほぼ毎日筆を取っていることがよくわかる〔註11〕。床に横たわったままの揮毫も子規にとっては日常であり、書きぶりの出来不出来にも関心を払っていた。

#### 第四節 子規の書

子規が書に強い関心を抱いていた様子を、子規の門下で、少年小説で知られた佐藤紅緑（一八七四～一九四九）の体験から垣間見ることが出来る〔註12〕。

僕は字を書く事が下手で、いつも其れで叱られた。字が拙くては文学者になれない。同人の中で最も字が拙いのが二人ある。一人は君で一人は君と同郷の竹子といふ男だと先生が言った。先生は僕に新聞紙を広げさして筆の持ち方を教へる。それ、君は一本の指を掛けるからいけない。二本の指を……あ、鷲掴みではいけないよ。指と指の間だ。あ、いけないな。

まるで御母さんが子供に教へる様な騒ぎである。其れは僕が

二十七、八歳、もう一人前の新聞記者だったのである。

子規の書の学習はすでにその幼少期にはじまっている。

明治五年、子規の父、常尚が四十歳で歿した。子規にとって父親の記憶は乏しかった。その数少ない親子の触れ合いに、手習いを指南された記憶があった〔註13〕。父を喪った六歳の時には、伯父で御家流に巧みだった佐伯半弥のもとに手習いに通うようになっていた。七歳のころに入学した末広学校も習字が中心であったと述べて、上級に至ってからは武智五友の書を手本に学んだ。五友は日下伯巖門で明教館教授を務め、のちに私塾を開いた人物である。

このほかにも山之内伝蔵という手習い師匠のもとにも通っていた。さらに七歳から祖父大原観山の私塾で素読を学び、松山中学に進学する頃には河東静溪に詩の薫陶を受けた。十五、六歳になると、月に一度仲間が集まって書画会を催していたという〔註14〕。

子規は父が歿する直前に松山藩士として家督を相続している。まもなく学制が整って小学校で教育を受けることになるが、近世的な武家の教育として、漢字と習字が重視されたのだろう。母、八重は幼少期の子規について次のように回想している〔註15〕。

字は山内伝蔵さんといふ人の処へ一年も習ひに行きましたが、判紙へ物を書くことが大すきで、昔から半紙はよく使ひよりました。

した。

子規を取り巻く環境と、生来学芸を好む子規の性向が、書に対する関心を高めていったのだろう。

子規の蔵書目録には『本朝名公墨宝』、『近古名流手跡』、松尾芭蕉の『和漢朗詠集』、『王羲之墨帖』、『萬安橋碑石摺』、『顔真卿墨帖』など、和漢の名跡を見ることができるとある〔註16〕。いずれも江戸後期の書の学習材として刊行されたものと考えられ、子規の書に関する基礎的な教養が、このような環境のもとで醸成されたことが理解される。

また、折に触れてさまざまな筆跡を過眼し、それぞれに心を動かされている。良寛の歌と書にはじめて触れた時には次のように述べている〔註17〕。

僧良寛歌集を見る。越後の僧、詩にも歌にも書にも巧なりきとぞ。詩は知らず。歌集の初にある筆跡を見るに絶倫なり。歌は書に劣れども万葉を学んで俗気なし。

明治三十三年、『僧良寛歌集』を贈ったのは中学を卒業したばかりの會津八一だった。その万葉調の歌もさることながら、良寛の書を「絶倫」と評している。こうした「俗気」の無いものを子規は好む。

同様の評を、幕末の歌人、平賀元義の歌と書にも与えている〔註

万葉以後一千年の久しき間に万葉の真価を認めて万葉を摸倣し万葉調の歌を世に残したる者実に備前の歌人平賀元義一人のみ。真淵の如きは只万葉の皮相を見たるに過ぎざるなり。世に義之を尊敬せざる書家なく、杜甫を尊敬せざる詩家なく、芭蕉を尊敬せざる俳家なし。しかも義之に似たる書、杜甫に似たる詩、芭蕉に似たる俳句に至りては幾百千年の間絶無にして稀有なり。

歌人が万葉調の歌を尊重するさまを、書において王羲之を尊ぶ姿勢などと重ね合わせながら論じ、元義が万葉調の歌を真に詠み得た稀有の存在であることを強調している。そして、その筆跡についても高く評価する〔註19〕。

元義の筆跡を見るに和様にあらず寧ろ唐様なり。多く習ひて得たる様にはあらず只無造作に書きなせるものから大字も小字も一様にして洪滞の処を見ず。上手にはあらねど俗氣無し。良寛と同様に、一見無造作にさえ見える「俗氣」の無い元義の書に好感を抱いていた。

子規は、ともに日清戦争に従軍した中村不折と親しく、新聞『日本』をはじめ、しばしば挿絵や表紙などの絵を依頼している。不折は情熱に溢れ、自らの絵画に対する考えを方々で語った。子規は、

不折との交流によって絵画における写生の意味を考えたことから、俳句における写生の重要性に気づくこととなったのである。しかし、子規は、書の面では不折や碧梧桐と一線を画している。不折らが漢碑や北派の書などを撰取して、それぞれの書を造形的に作り込んだのに対して、特に晩年の子規は、匠気を抑え、字形や配置などを整え過ぎない開放的な表現を求めていたようである。

なかでも子規が高く評価するのは松尾芭蕉の手跡である。「俳人の手跡の巧拙は俳句の巧拙と略ぼ相同じ」として、俳諧の歴史上、芭蕉が双方において高い位置にあると論ずる〔註20〕。

俳諧三百年の間最書を善くする者は松尾芭蕉なり。俳句に於て芭蕉を压倒せし蕪村も書に於ては数歩を譲らざるを得ず。否、徳川三百年間に於て仮名交りの書を善くする者一人の芭蕉の右に出づる者無し。

芭蕉の書は蕪村を凌ぐと述べた上で、橘千蔭や紀貫之らと比較しながらその美質について論じていく。

千蔭の如き仮名書の名を一世に博し今に於て猶稱賛せらる、者なれども漢字の拙き仮字の変化無き雅致に乏しき終に芭蕉に比すべくもあらず。貫之の仮名は百世の下にありて師宗とせらる、者其筆の巧妙其字の整齐、一画誤らず一糸乱れざるに至りては殆んど技術の極点に達して見る者をして到底模倣する能は



ざるの感を起さしむ。固より千蔭輩の及ぶ所にあらず。しかも其欠点をいはゞ巧緻に趨りて縹緲の趣に乏しく、整齐に偏して変化の妙を欠ぎたり。芭蕉の書は漢字をして多少仮字化せしめたと共に亦仮字をして幾何か漢字化せしめたるがために、和様の卑俗にも陥らず貫之流の平穩にも倣はず、漢字仮字は一種の調和を成してしかも雅致あり気力あるを得たり。此点に於て芭蕉は実に古今に独歩せる者なり。

「貫之の仮名」は「高野切」のような平安古筆を指すのだろう。千蔭の書は雅致に乏しく、「貫之の仮名」は「技術の極点」に達しているけれども「縹緲の趣」に欠けるといふ。その点、芭蕉は、漢字を仮名に、仮名は漢字に近づけて独自の雅致に富んだ表現を生み出しているという。子規が丁寧な書を観照していることがわかると同時に、古典的でありながら、おおらかで個性に富む芭蕉の書を評価していることがわかる。良寛や平賀元義の「俗氣」を脱した表現や、芭蕉の「縹緲とした趣」は、子規が書に求める最も重要な要素だったのである。

病床に臥せる以前の子規の書は、一時、芭蕉に一脈通じるものがあったが、造形的に特定の書に偏ったところは見られない。書家としても知られた門下の岡麓が「書の方からいふと先生はきはだつて新しい形、さうざうしい線などをしりぞけてゐられる」と語るよう

に、子規は目先の新しさを追わず、古典の学習と觀賞を背景にした、自然な表現を求めていったのである〔註21〕。おそらく子規には作意を超越しようという自覚があったのだろう。

夏目漱石は、次のように評している〔註22〕。

子規は人間として、又文学者として、最も「拙」の欠乏した男であった。永年彼と交際をした何の月にも、何の日にも、余は未だ曾て彼の拙を笑ひ得るの機会を捉へ得た試がない。

子規が漱石のために描いた東菊の画にはじめて子規の「拙」を見出した漱石は、大いに興味をそそられた。その書についても同様の指摘をしている。森円月に宛てた手紙である〔註23〕。円月が漱石のもとに送り届けた、伊予の僧、明月の双幅について子規を引き合いにだして感想を述べている。

あの字は小供じみたうちに洒落氣があります。器用が崇つてゐます。さうして其器用が天巧に達して居りません。正岡が今生きてゐたら多分あの程度の字を書くだらうと思ひます。正岡の器用はどうしても抜けますまいと考へられるのです。

円月から借りた明月の幅には器用が崇つて、その出来は「いま一息」であると判じた。そして子規の書は、その明月の幅に共通する器用なものであるが、その器用は抜けないものだらうという。才氣に溢れた子規は、自らの「器用」を知っていたからこそ超俗的な、

悠揚とした表現を求めていったのだろう。

明治三十四年以降、病床で仰臥のまま筆を取ることになった子規は、皮肉にもこの「器用」を放擲せざるを得ない状況になった。あまりの痛みに呻き声をあげながら揮毫した「五月雨五句」は、「俗気」のない表現を求めた子規の現実と内面をよく示した書であるということができらるだろう。

## 第二章 「五月雨五句」の伝来と子規の筆跡の尊重

### 第一節 付属の書簡巻から

「五月雨五句」と同じ箱に収められる計三通の書簡から、この懐紙の伝来の状況を知ることができる。これらのうち、長塚節の二通については『長塚節全集』第六巻（春陽堂書店、昭和二年）の二九二頁から二九五頁に収められているが、人名に伏字が施されたり、全文が翻刻されていなかったりするため、改めてここに示すことにしたい。なお、句読点は便宜的に付したものである。

〈一通目・図6〉

（封筒）〈表〉岩代信夫郡瀬上町 門間春雄様 〈裏〉茨城県

結城郡岡田村 長塚節 七月十日

〈本文〉

卒爾ながら申上候。小生の友人にて正岡子規子の筆跡を数多所

藏致居候もの有之候が、近年家道不如意に候処、右を小生より先年条件附にて譲渡いたし候もの故、今回特に相談有之候は、老母の病気のため金子調達の必要生じ、他に方策も無きま、右筆跡中の数点を売却致度故尽力を望むとのこと、今日まで小生の手前を兼ねて持こたへ候儀、気の毒にも相成申し候に付、心分の斡旋可仕旨約束仕候。就ては大兄に於て一品御引受被下思召も有之候はば、現品本人より直接郵送致させ可申候。

五月雨や上野の山も見あきたり。

病人に鯛の見舞や五月雨。

病人の枕ならべて五月雨。

五月雨や棚へとりつくもの、蔓。

さみたれや背戸に落合ふ傘と傘。

名は無之候へ共、嘗て御覧に入れ候様の大きさの画箋紙に見事に書かれ申候。殊に立派の幅仕立に候へば、此は珍敷ものに有之候。小生の旧蔵品に有之候。

山茶花や爐を開きたる南受。

此も幅仕立にて一行書名人、不折山人の旧蔵と申者候。但し小生は見不申候。他に歌の短冊三枚句の短冊一枚、以上の内五月雨の句殊に面白しと存申候。至急御返事被度願上候。小生の旧蔵故行方不明に相成候ことか惜しく大兄に於て御奮発被下候

は、此上もなき仕合と存申候。

嘗て申しきけられ候中尊寺のことに就いては新任の岩手県知事は近親のもの故、今回地方官会議にて出京中相尋ね申し候処、県編纂の分は疎略と申候。黒田氏の奈良と平泉も一寸見申候へ共、あれにて十分と存申候。あとは見る人の頭脳次第にて如何様にも解決せられ可申候。小生は両度参り候へ共更に何の智識も予備は無之、それにて小生は悔御不申候。何の詮議よりも御覽に相成候が大事に有之候。勿々。

七月十日。節。

門間様。侍史。

〈二通目・図7〉

〈封筒〉〈表〉岩代信夫郡瀬上町 門間春雄様

〈裏〉茨城

県結城郡岡田村 長塚節 七月廿日

〈本文〉

子規子の筆跡其中御手元まで郵送可仕、在京の知人なる岡三郎と申すが所持者に有之候。此人より直接相と、け申す様取計らひ申候。鮫鱈の句は画箋紙に非ずして唐紙には無之候や。

うれ残る鮫鱈買へとす、めけり。

妻を呼ぶ内証ばなしや鮫鱈鍋。

老妻の火を吹く顔や鮫鱈鍋。

等の句むしろ順序もなく書きつけ申候者ならば、しかして既に幅に仕立候ものならば、此は今回の岡氏の蔵品にて、曾て小生より譲渡したる内の一つに有之候。果して然りとすれば五月雨の句等を大兄へ御す、め申候ことも妙な縁と存申候。今回の鮫鱈にまさる一段に有之候。短冊も同様可有候。扱而病父其後追日よろしく、八十日八度以上の熱を持続致候故、一時は母と死後のことまで語り申候へども、只今はそれも笑ばなしの一つに相成申候。夏目先生には昨年以来一回も逢ひ不申候。然し大分御丈夫の由、此間のホト、ギス催能の席上森田草平氏よりき、申候。精神病者なることはふるく申居候こと故今更不思議にもき、不申候。勿々。

七月廿日。節。

門間様。侍史。

〈三通目・図8〉

〈封筒〉〈表〉福島市柳町 池田龍一様

〈裏〉四月十日 瀬上門

問勝弥

〈本文〉

御手紙拝見子規先生五月雨句之幅御引取被下候趣まことに忝く

存上候。無款のもの故御希望に従ひ長塚さんの手紙添えて差上可申候。長塚さんの手昏中「小生の友人にて正岡子規子の筆跡を数多所蔵致居候もの」と有之候は岡麓氏のことにて御座候。尚此手紙に続く節全集掲載亡兄春雄宛書簡（其九）の伏字×××のところ、岡三郎なるに依つても自ら明かなること御承知被下

度候。小家にとつては如上手紙の示す因縁之品故、先般来苦慮罷在候処、此度之御同情何としても難有御蔭様にて長塚さんまた亡兄春雄への義理も申訳も相立ち、子規先生作品之為にも却て小家所蔵より幸と存申候。何れ此日曜日にては御在宅中持参致候し拝眉万々申上度不取敢右御礼ながら御返事迄申上候。草々。

四月十日。門間勝弥。

池田龍一先生。

長塚節の書簡は二通とも福島の間春雄に宛てられたもの。春雄は長塚節に傾倒した歌人として知られている。消印や書面から大正二年七月十日と、同じく二十日のものであることがわかる。

三通目にあたる書簡を差出した門間勝弥は門間春雄の弟である。春雄の歿後、この幅を池田龍一に譲る際に宛てたのがこの書簡と見られる。

これらの書簡は、落款の無い「五月雨五句」を補う形でその来歴を証明するものとして添付された。子規のもとにあった懐紙は長塚節に与えられ、のちに節から麓のもとに移り、麓の事情の変化に伴つて門間春雄が譲り受け、春雄が歿すると池田龍一の有に帰することとなった。この伝来は龍一の箱書きとも内容を一にする。

## 第二節 子規から長塚節、岡麓へ

子規は長塚節（一八七九―一九一五）の人柄をとて愛した。碧梧桐が二人を回想してその様子を綴っている「註24」。

節は、左千夫の書いている通り、子規の实の子でもあるかのよ  
うに愛された。聡明で無邪気で敏感で多分に天才味を持った青年  
年だった。我々も歌仲間ではちばん好きだった。この新たな伴  
侶は、苦悩の世界である子規の病床をどれだけ明るくしたこと  
か。

節が初めて子規庵を訪ねたのは明治三十三年三月二十八日のこと。  
この日以来、二人は急速に距離を縮めていった。

初対面の時から、もう旧知の如し位ではない、まるで我が仮  
放題な腕白と言った風だった。だから、節の口をついて出る一  
語一語さえが、暖かい笑いの種となるのであった。理屈も何も  
なく、ただ可愛くて堪らなかつたのだ。長い間の往来で、コチ

コチになつていた我々の外に、卵をむいたようなホヤホヤな人間が、そこに投げ出されたのは、子規にとつて始めての経験であるよりか、天から恵みで授けられたヴィナスの使者でもあったのだ。満悦した子規が、「我が病」の原稿をくれてやったと言つて、別に不思議がる事もない。もし乞われれば、子規の持つているすべてをくれてやったかも知れないのだ。

この言葉を裏打ちするように、子規は自ら揮毫したものを節に数多く与えていた。その様子は周囲が羨むほどであった。歿年の春、節に宛てた書簡で、子規は節の来訪を促している「註25」。

僕の内に反古一束あり。歌反古文反古画反古杯何とは限らず。若し君此反古などの内にて入用の者あらば早く来て持て行き賜へ。早く来なければ屑籠に投げこむべし。

先の碧梧桐の一文は、未完となつた子規の随筆「我が病」の原稿が節の手に渡つたことをきっかけに子規と節の関係を回想したものである。岡麓（一八七七―一九五二）は、その実情をもう少し詳しく記している「註26」。

長塚君が子規先生にものをかいて頂いたのはただの一度きりであつたと思ふ。それから前文の反古と云はれたものを頂いて来たのと、逝去の三日前に半紙一枚にかかれた七福神の持物の画とであつた。たびたびものなどかいて頂いた事のあるやうに

思ふ人があると違ふ。

子規に可愛がられた節は、頻繁に書画を揮毫してもらつて譲り受けていたやうな印象を周囲に持たれていたやうだが、実際には、はじめて子規庵を訪れた日に興に乗じて筆を執つた二十枚の短冊と、歿年の「七福神の持物」の画を揮毫してもらつただけであるという。このほかには「反古と云はれたもの」と、往来で手元に遺された書簡があるだけである。この反古は、先の子規の書簡に見られる通り、促されて取りに向いたものであろう。

この収蔵の状況から、「五月雨五句」は反古に含まれていたもので、三十五年の春に入手したものと推測される。「反古」という書きぶりからすれば、この時にはまだ、掛幅に仕立てられてはいなかつたのだらう。

こうして節のもとにもたらされた「五月雨五句」は、一通目の書簡に見られるように、「条件附」で岡麓に譲られた。節と麓は子規門下の歌人として親しく交流していた。明治四十年五月の往復書簡に、子規の遺墨が節から麓に移動する様子が綴られている。二十一日の麓宛の書簡は次の通りである「註27」。

過日御懇談申上候品々は、家族のもの上京致し候に付其節持たせ候。短冊其他のものも、手紙を除いては小生の手もとは一物も止め不申候。御相談相叶ひ候はば、金子にて頂戴致した

く候。

これに対する返書と見られる書簡が、二十三日に節のもとに届いている。

故子規先生の遺墨ノ件御届け下さる由いづれ一応拝見のうへ世間でいふ相当の料金にて御ゆづり受けいたし度拝見早々に御相談申出候。右料は金子にて云々もかしこまり候。実を申せば小生の昨今非常の胸算用に苦しき折から十金にてもヤリクリ中の場合ながら再び叶ひがたかるべき御話ゆゑ萬事さしおいて御ゆづり受したく候。

二人は、この書簡のやり取りの前に、すでに子規の遺墨の譲渡について相談していたようだが、この時点ではまだ、麓は節の所蔵品を目にしていない。しかしこの時、節は、子規から受け取った書簡以外の遺墨は、一物も残さず方々に譲り渡す心づもりでいたことがわかる。

これらの書簡からは、節から麓に譲られた遺墨の具体的な内容を読み取ることができない。しかし、「胸算用に苦しき」麓が、子規の遺墨を入手するまたとない機会に巡り合って奮発する様子を取ることができる。「五月雨五句」もまたこのころに譲渡されたものと見て不自然はない。

### 第三節 岡麓から門間春雄へ

麓が秘蔵した子規の遺墨は、のちに各所に散っていくことになる。そのうちの何点かが門間春雄（一八九〇～一九一九）に譲られ、そのなかに「五月雨五句」も含まれていた。

明治二十三年、福島県信夫郡瀬上町で醤油醸造を家業とする門間家の長男に生まれた春雄は、福島中学在学中から俳句や短歌に親しみ、特に長塚節や斎藤茂吉らと親しく交流した〔註28〕。上京して早稲田大学に入学し、子規歿後の子規庵にも訪れたことがある。また、子規の書に強い関心を抱いて、子規門下の伊藤左千夫にそれについて書簡を送り、回答を得たことが知られている。書簡卷の三通目を認めた門間勝弥は、春雄の七歳下の弟である。

春雄の子規の書に対する思い入れには、殊のほか強いものがある。明治四十四年、二十二歳の春雄は、節にその考えの一端を伝えてい〔註29〕。

小生は先生の人格は勿論先生の書風を慕ひ居候。先生の書は天才であつたと思考され候。そして真面目に書を書かれた事と存候。先生は誰の書風を習はれしか、疑問に候。二十歳頃頼山陽の手本を習はれしにあらざやと存候。又母方の祖父なる大原観山先生の書風を習はれし事はなきかと存候（大原先生の書は未だ見た事無之候）三十五年ころの子規先生の書が最も無邪氣

な尊い字であると存候。友人が「病気で苦しいからあんな字を書いたのだ」と申候へども小生には左様思はれず品位があるように思はれ要するに人格の表現と存候。左千夫先生及び先生の書が子規先生の書風に似て居る様に見受けられ候。子規先生の書につき御承知の事有之候ハ、是非承り度。小生子規居士の書に接したるハ稀にて主として石版摺のものを参考と致したるに候へば先生の書簡二三御借り申度願上候。

この書簡のころには、まだ子規のまとまった遺墨集は刊行されていない。春雄は、子規の書に頼山陽や外祖父である大原観山の影響を見て、最晩年の作を子規の人格が表れた最も品位の高いものとして評価する。さらには伊藤左千夫や節の書風が子規に通じることを指摘し、知るところがあれば教えてもらいたいとも言う。加えて子規の書簡を借り受けたいとの希望を申し入れる。二十二歳の春雄が子規の書を詳細に観察した上で、その背景を探り当てている点は注目すべきである。単に敬愛する子規の遺墨であるから、ということだけではなく、書としての魅力を総合的に、分析的に捉えているのである。

節はこの春雄の申し出に応えて、翌年三月に書簡を貸し出して、書簡を受け取って、春雄は返信でその感激を伝えている「註30」。

本日御手紙と共に子規先生の遺墨到着致し飛びたつ程嬉しく存候。室に入り心を鎮めて遺墨を拝し親しく子規先生に接する如き感にうたれ申候。如此毎日遺墨をじつと拝し居らバ何かに残るものがあるかと存ぜられ候。

この書簡のなかでは返却を「六月頃」としていたが、結局七月後半になって送り返したようである「註31」。

こうして春雄が子規の筆跡に強い関心を抱いていたことは節の知るところとなり、ほどなく麓が手放す遺墨の一部を入手するための土壌が形成されていった。

麓が所蔵する子規の遺墨を譲渡するにあたって、長塚節がその相談にあたったことが書簡からわかる。麓と春雄のあいだには、それまで直接の交流はなく、節の取りなしによって譲渡が実現することとなった。大正二年七月十日、節から春雄に宛てられた一通目の書簡では、麓の名を伏せたまま子規の遺墨を割愛したい者がいることを知らせる。なかでも「五月雨の句」は、句をすべて書きだして詳細に状態を伝え、強く入手を勧めている。この時には、「立派の幅仕立」となっていることから、節か麓のもとで掛幅に仕立てられていたものと考えられる。

この書簡を受け取った春雄は、七月十五日、購入を希望する旨を書簡に認めて早速節に返信した。春雄は、掛幅に仕立てられた「画

箋紙に鯨鱈の句を十句認められたるもの」と、「家五百秋の芝居の大鼓鳴る」という短冊を、この直前に他所から入手していた「註32」。二通目の書簡にある通り、実はこの「鯨鱈十句」もまた節の旧蔵品で、麓が手放したものであった。

節は春雄の回答を受けて麓に書簡を送っている「註33」。春雄の住所に加え、貴重な品を預けても問題ない確かな人物であること、旧蔵の「鯨鱈十句」と見られる幅を所持していて価格交渉も運びがいいと考えられることなどを伝えた。そして、麓が送った子規の「五月雨五句」と短冊五葉は、二十六日に春雄のもとに届いた。短冊の一部は「本郷の古本屋主人永森と申もの」が「鯨鱈十句」の幅と共に送ってきたもので、その時には購入しなかった品である「註34」。さらに「五月雨五句」について述べている。

鯨鱈の幅如仰唐紙に有之今五月雨の幅物を見るに天地の揉唐紙ハ共に同種のものにて後者は更に其以後の筆かと存候へども如何に御座候や。これは是非御願申度候。就てハ箱を製し為紀念大兄に其箱書を御願申上永く保存致度候。

天地の揉紙は、「鯨鱈十句」と共通するもので、今日の装丁もそのままであることがわかる。春雄は「五月雨五句」を「鯨鱈十句」よりあとの揮毫と見て、節にも意見を求めている。この幅を大変気に入った春雄は購入を即断し、箱を新調した暁には節に箱書きを頼

みたいとも伝える。実際、十一月二十九日の書簡では、箱が仕立上がったことから箱書きを依頼している。しかし、何らかの理由で節の箱書きは実現しなかったのか、今日では春雄の歿後に高浜虚子が記した箱が付されている。

節もまた旧蔵の品が自らの交遊の範囲に留まることを期待し、困窮している麓の経済を心配しながらも、どうにか折り合いをつけようと思案していた「註35」。自身と親しく交流し、子規の書に強い愛着を示す春雄の申し出は、節にとっても理想的だったのである。

最終的に春雄は、「五月雨五句」のほかに「山里の」と「へなつちの」という歌の短冊の購入を決め、さらに麓が所持していた子規の画についても譲渡の意向を聞き合わせて欲しいと伝えた。また伊藤左千夫が所蔵する画にも関心があることを加え、節の代表作「土」の原稿も切望する「註36」。春雄が希望する価格は電報で伝えられ、正確に把握することができないが、八月十五日に節から春雄に宛てた書簡に次のように記される「註37」。

十円は不廉とおぼされしかと存候へ共、関西に於ては幅仕立の短冊二枚にて百五十金に売行きし事実も有之候に付、十円だけは喜捨の覚召に候はば、後日にいたりては決して悔も有之間敷と存申候。

このくだりは、これらが十円で譲渡されたように読むことができ



る。ただし、「短冊二枚にて百五十金に売行きし事実」からすると相対的に安く、あるいは春雄の希望額からの増額幅が十円だった可能性も考えられようか。

茨城の豪農の長男である節と福島醸造元の家督を継いだ春雄とは、境遇が似通っていて、明治の末年に知り合うとほどなく互いに関心を開いて往来する間柄となった。子規にまみえることはなかった春雄だが、「五月雨五句」を入手した大正二年とその翌年、夏目漱石や河東碧梧桐、中村不折、そして長塚節ら、子規をよく知る人物のもとを訪ねている。

春雄の関心は俳句や短歌を通して作家そのものへと向かい、それぞれの筆跡を座右にしたいという欲求へと連なっていたのだろう。福島中学から早稲田大学に進みながら、家業のために大学を途中で退き帰郷せざるを得なかった春雄は、東京の文壇に容易に足を運ぶことも叶わなかった。先に述べたように、子規の書に対する春雄の批評の眼差しは、人物に対する敬慕という域を超えて、書の本質を捉えようとする深度を伴っている。同じ空気を共有し得ない知己に、筆跡を通して接しようとする春雄の切実な思いが、こうした書の所蔵を促し、鋭い観察眼を磨きあげるための原動力となったのだろう。

#### 第四節 門間春雄から池田龍一へ

春雄が長塚節の仲介で岡麓から「五月雨五句」などを譲り受けた二年後の大正四年、節は三十五歳でこの世を去る。大正八年二月、春雄も二十九歳の誕生日を迎えてまもなく歿する。春雄は子規の遺墨をこの時まで手元に置いていた。

三通目の書簡は、春雄の四番目の弟、勝弥から福島病院の医師、池田龍一（一八九〇～一九六九）に宛てたものである。書簡に年が記されていない上、消印も解読し難いために、この手紙の差し出された時期を特定することができない。封筒に貼られた野口英世の肖像を使用した八円の額面の切手から類推すると、昭和二十五年かその翌年の書簡とみられる〔註38〕。虚子の箱書さが昭和二十五年であることを勘案すれば、この書簡もこの年のものであると考えるのが自然である。

勝弥は、大正三年四月、東京の橋田病院に入院していた長塚節を、三番目の兄、武夫とともに訪ねたことがある。これは春雄に命じられたことによるものだったが、勝弥もまた節の人品に魅了され、のちに「アララギ」に歌を発表するようになった。昭和六年に刊行された『門間春雄歌集』の編集作業を担い、年譜を作成したのも勝弥である〔註39〕。門間家には代々文芸に秀でた人物が多く、勝弥もまたその一人である。

春雄は大正六年に気管支カタルを発症して咯血し、福島病院に入院した。その後も入院を繰り返して、福島病院で歿する。主治医を務めたのは正木俊二（一八八七―一九六二）である。俊二は不如丘と号して、俳句や随筆などを手掛けた作家でもある。不如丘と入れ替わるように赴任してきたのが池田龍一だった。広島県深安郡出身の龍一は、京都帝国大学医科大学および大学院を終え、大正九年に小児科部長として福島病院に着任した〔註40〕。そのまま福島に根を下ろし、福島病院の院長や福島県立医科大学名誉教授などを歴任した。

龍一は青燈子と号して、アララギ派の中村憲吉らと交流した歌人である。箱書きを依頼していることから、高浜虚子と交友関係があったことも知ることができる。画家で俳人としても知られた小川芋銭とも親しく、書画も得意とした。芋銭は節や春雄の友人でもあった。赴任の時期からみて、龍一に春雄との接点はなかったものと考えられるが、何らかの形で勝弥との知遇を得たのだろう。周囲の人物とから春雄の人物について聞きおよんだことも一再ではあるまい。勝弥は、春雄の歿後三十年に渡ってその手沢の品を守ってきたのだろう。勝弥がこれらの品を手放すことになった事情はわからないが、早世した春雄が切望して入手した節や麓の旧蔵品を託す人物として、歌や書画に親しみ、春雄と人脈を共有した龍一は最もふさわ

しかったのである。

龍一が譲り受けた時点で、「五月雨五句」には箱書きがなく、すぐに虚子にこれを依頼した。「五月雨五句」の箱は古色を纏っていることからすると、春雄が用意して節に染筆してもらおうつもりでいた箱が、そのまま付されていたのかもしれない。さらに節の春雄宛ての書簡二通と勝弥から龍一に到来した書簡一通とを一巻に仕立てて自身が箱書きを認めた。同時にこの二件を収めることができる外箱を誂えて、この幅の来歴を記したのである。

## 結

正岡子規筆「五月雨五句」について、子規がこれを揮毫した時の状況から、長塚節、岡麓、門間春雄、池田龍一へと移る所蔵の履歴に注目して稿を進めてきた。

松山藩士の家に生まれた子規は、漢学を背景に唐様の書を学んだほか、御家流の書にも親しんだ。そして、さまざまな形で和漢の名筆を過眼して、その本質を見定めようとする。こうした素地の上に、超俗的な、一見粗野にさえ見える表現が生み出された。とりわけ明治三十四年以降、病床で筆を取らざるを得なくなってきた子規の書に、その本質が見出されるのである。苦悶のなかで認めた「五月雨五句」は、子規の書の特質を顕著に示す一点と言い得るだろう。

揮毫の背景が如実に把握できる点でも貴重な作である。

また、この遺墨は、子規を敬慕する人物、なかでも長塚節を中心とする歌人のあいだに伝来し、珍重されてきた。

子規は節の人柄と才能を非常に愛し、身の回りにあった反古を与えた。「五月雨五句」はこのなかに含まれていたものと見られる。節はやがて、これを子規の門下で自らも親しく交流した岡麓に譲り、麓が困窮すると自ら斡旋して門間春雄のもとに移さしめた。節の勧めもさることながら、両者とも熱望してこの幅を所有するところとなったのである。春雄の歿後は、門間勝弥の手によって、春雄が歿した福島病院の医師で歌人でもある池田龍一のもとで丁寧に管理された。麓、春雄、龍一はいずれも書に通じている。特に、麓や春雄の言説には、子規の手跡を書として深く観察し、その人格と重ね合わせながら観照しようとする姿勢が色濃い。

近代書道史という文脈において種々の遺墨を語ろうとする時、ともすると和漢の古典の受容を背景にした造形的な側面に比重を置き、その類型化を図る試みに終始しがちになってしまう。「五月雨五句」に見られる書風は、類型化されかねない書の特徴を認識している子規が、自らの「俗気」から脱するべく築き上げてきたものと言えるだろう。そして、これを所有した人物もまたその子規の意図に気がき、「五月雨五句」の書に深く惹きつけられていたのである。

## 註

- 1 子規の遺墨集としては、子規庵保存会編『子規遺墨集』（巧藝社、昭和十年）、山上次郎監修『子規遺墨』（求龍堂、昭和五十年）がよく知られている。また、『子規遺墨』をもとに編集し、子規の書画を中心に論じた山上次郎『子規の書画』（二玄社、昭和五十六年。のちに青葉図書から改訂増補版が、二玄社から新訂増補版が刊行された）がある。これらの書籍は、『子規全集』（全十五巻、アルス、大正十三年）、『子規全集』（全二十二巻、改造社、昭和四年）、『子規全集』（全二十五巻、講談社、昭和五十年）とともに子規研究の基本文献とされる。「五月雨五句」の画像はこれらの書籍に掲載されていない。

- 2 講談社版『子規全集』第十二巻六五七・六五八頁に再録。以下、本稿では講談社版『子規全集』を用いた。

- 3 岩波文庫の高浜虚子選『子規句集』（初版昭和十六年、岩波書店）は、子規の句集のなかでもっとも親しまれている書籍である。現在は平成五年改版の文庫が一般的である。

- 4 斎藤茂吉『童馬漫語』（春陽堂、大正八年、『斎藤茂吉全集』第九巻、岩波書店、昭和四十八年に再録。）収録の「俳句寸言」。大正五年十一月二十九日の記述である。

- 5 岩波文庫版『子規句集』坪内稔典解説、三四四頁。

- 6 『寒山落木』（国立国会図書館蔵、『子規全集』第一巻に収録）。明治二十五年夏の句である。
- 7 講談社版『子規全集』第十一巻、二〇七頁。
- 8 河東碧梧桐「君が絶筆」（明治三十五年、小谷保太郎編『子規言行録』吉川弘文館。『子規全集』別巻二、一九六頁から一九八頁に再録）。
- 9 註8参照。
- 10 註1。『子規の書画』新訂増補版八十七〜九十四頁を参照した。
- 11 『子規全集』第二十二巻。
- 12 佐藤紅緑「糸瓜棚の下にて」（『子規全集』別巻三、三四二頁）。
- 13 「筆まか勢」第一篇、「父」。『子規全集』第十巻、一五〇頁。
- 14 子規は自らの少年期の手習いについて「筆任勢」第二編、「手習の時代」に回想している。『子規全集』第十巻三二四、三二五頁。『子規の書画』新訂増補版十七〜二十四頁を参照。
- 15 河東碧梧桐記「母堂の談話」（『子規全集』別巻二、一八五頁）。
- 16 『子規全集』第十四巻、「蔵書目録」。
- 17 「病牀読書日記」（『子規全集』第十四巻四六五頁）。
- 18 「墨汁一滴」（『子規全集』第十一巻一〇八頁）。
- 19 「墨汁一滴」（『子規全集』第十一巻二〇頁）。
- 20 「俳人の手跡」（『子規全集』第五巻六十、六十一頁）。
- 21 「思出の記」（岡麓『正岡子規』白玉書房、昭和三十八年。二五四、二五五頁）。
- 22 夏目漱石「子規の画」（『子規全集』別巻二、六三七頁）。
- 23 大正五年十月十八日森円月宛書簡（『漱石全集』第二十四巻、岩波書店、平成九年。五七八、五七九頁）。
- 24 河東碧梧桐「子規の回想」（『河東碧梧桐全集』第十一巻、短詩人連盟、平成十八年）二四一、二四二頁。
- 25 『子規全集』第十九巻、六四二頁。
- 26 岡麓「正岡先生と長塚君」（『正岡子規』、七十二頁）。
- 27 『長塚節全集』第五巻（春陽堂、大正十五年）三五六、三五七頁。
- 28 「門間春雄年譜」（アララギ叢書第二十九編「門間春雄歌集」、岩波書店、昭和六年）。以下、春雄の履歴はこれを参照した。
- 29 明治四十四年十二月十三日長塚節宛書簡（『長塚節全集』別巻、三〇三頁）。
- 30 明治四十五年三月十五日長塚節宛書簡（『長塚節全集』別巻、三一五頁）。
- 31 明治四十五年七月二十九日長塚節宛書簡（『長塚節全集』別巻、三五頁）。
- 32 大正二年七月十五日長塚節宛書簡（『長塚節全集』別巻、三六八頁）。
- 33 大正二年七月二十日岡三郎宛書簡（『長塚節全集』第五巻、四四三、

四四四頁)。

34 大正二年七月二十六日長塚節宛書簡(『長塚節全集』別巻、三七二頁)。

35 大正二年八月十三日岡麓宛書簡(『長塚節全集』第五巻、四四五、四四六頁)。資産家で新傾向の俳句を詠んだ塩谷鶴平らにも麓の所蔵品の購入を持ちかけていたが、より親しい節に先に優品を勧めていたことが記されている。

36 大正二年八月十九日長塚節宛書簡(『長塚節全集』別巻、三七八頁)。  
37 大正二年八月十五日門間春雄宛書簡(『長塚節全集』第六巻、二九八頁)。

38 封書の郵便料金が八円となったのは昭和二十四年五月。それが十円に値上がりするのは昭和二十六年十一月のことである。野口英世の肖像を使用した切手は昭和二十四年十一月から売り出された。

39 全集書簡編者が門間勝弥のもとを訪れてまとめた、「聞き書橋田病院と節」(『長塚節全集別巻月報7』昭和五十三年)参照。

『福島県立医科大学史』(福島県立医科大学、昭和六十三年)や『福島県医師会史資料編』(福島県医師会、昭和五十六年)などでは福島病院に着任した年を大正九年としているが、『福島大百科事典』(福島民報社、昭和五十五年)、『福島県史二二人物』(福島県、昭和四十七年)などでは大正十年とする。福島病院における小児科設置

の状況を鑑みて、本稿では大正九年説を採る。龍一の履歴についてはこれらを参照した。

図1 正岡子規筆「五月雨五句」本紙

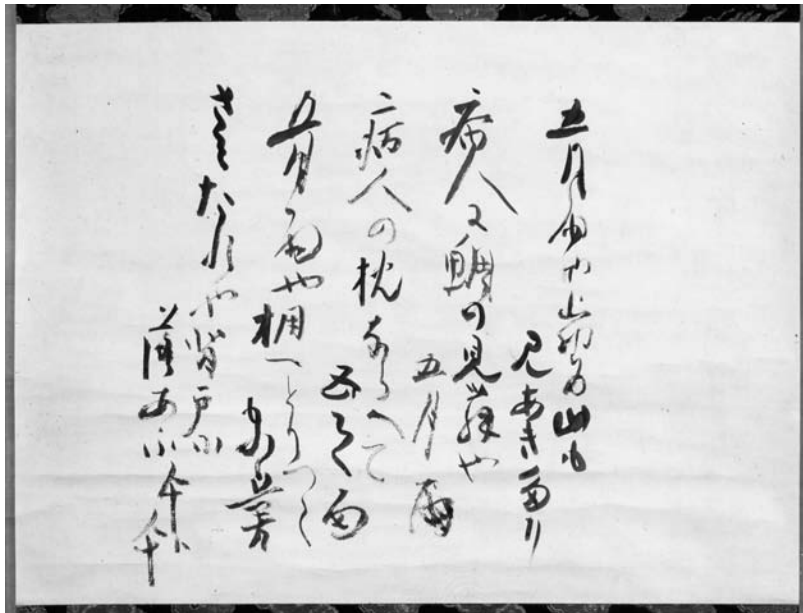


図2 全体



図3 外箱蓋裏

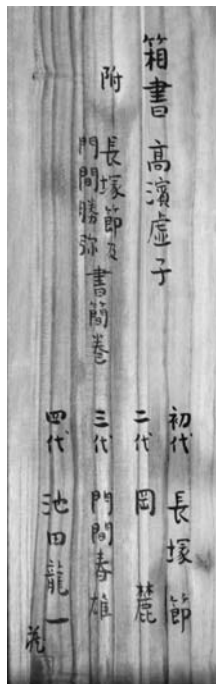


図4 外箱蓋表と内箱二件



図5 「五月雨五句」内箱蓋裏



図6 長塚節筆「門間春雄宛書簡（七月十日）」

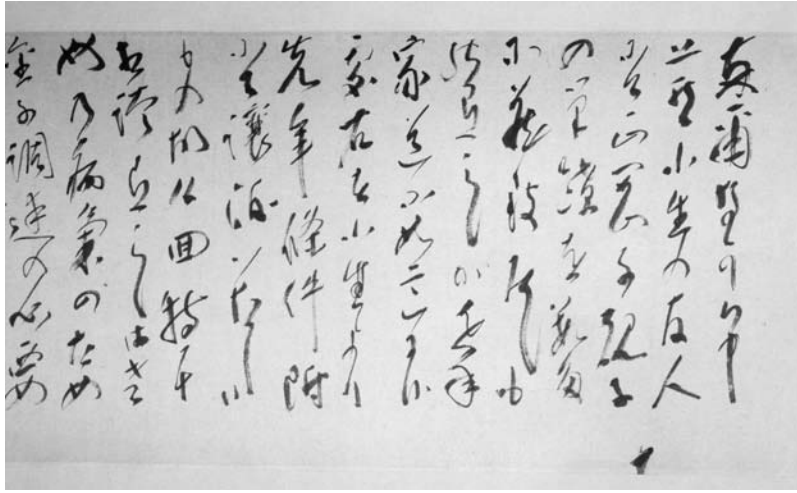


図7 長塚節筆「門間春雄宛書簡（七月二十日）」

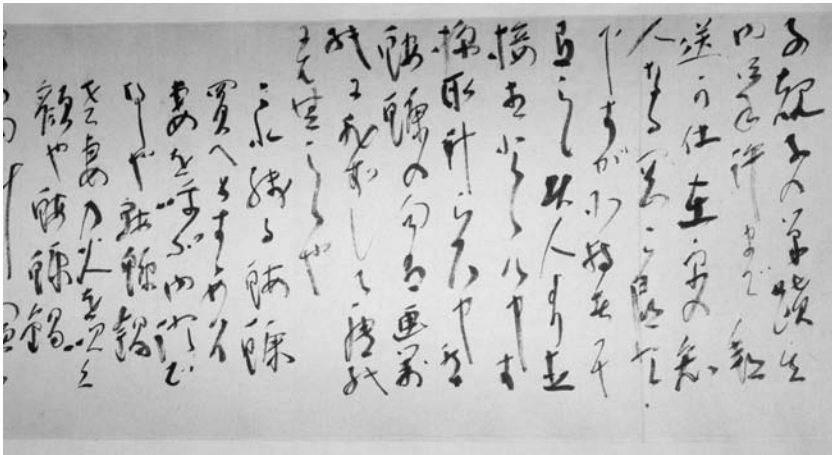


図8 門間勝弥筆「池田龍一宛書簡」

子規先生  
五月而向一陽は引取ると  
趣きなきはよく存之し  
冬款のよめ取は幸中々に  
ほい長塚先生の子規添えて  
さうと云ふは 長塚先生の  
手紙中「小島友人を以て  
子規の子を讀む物多し所  
ある所を以て」とあるは  
長塚先生の「こゝろは  
けしに読みし節々を採揚  
我亡後其の遺稿を以て(九)  
の伏字××のこゝろに  
に依つても自ら取らざること  
は承知をいつかし 小島に